SACHIHIRO　Tenrikyo Sachihiro Branch-Church Kouhou-shi　第14号　平成19年　1月21日発行

さちひろ

天理教狭千廣分教会の広報紙

1面・生きている。それだけで素晴らしい
2面・幸せを届ける言葉
3面・おやさま逸話篇から
4面・教会の動き・編集後記

発行：天理教狭千廣分教会　〒589-0021　大阪狭山市今熊1-1133　TEL072-365-2571
E-mail:wat@sachihiro.com　url:http://sachihiro.com　編集兼発行人・山口　渡

サンケイ新聞・【正論】欄で村上和雄先生が「いのち」はなぜ尊いのかを語る

生きている。それだけで素晴らしい

《38億年の命のつながり》

命を粗末にする事件が続発している。小・中学生が「いじめ」などで自殺している。さらに親が子を殺し、子が親を殺すという信じがたいことが起こっている。

生命科学の現場に50年近くいる者の立場から、命とは何か、命はなぜ尊いのかについて考えてみたい。

約38億年前、地球上に最初の生物が誕生した。そして、すべての生物の設計図は遺伝子によって受け継がれてきた。その遺伝子を変化させることにより、数千万種類とも言われる生物が生まれ、人類が誕生した。

私たちの遺伝子は、38億年間一度も途切れることなく、受け継がれてきた。この間に一度でも事故が起これば、ヒトは存在しなかったはずだ。38億年という気の遠くなるような時間をかけて、ヒトは選び抜かれてこの世に誕生した。

いま私たちは、子供をつくるというが、それは傲慢（ごうまん）だと私は思っている。世界中の優れた技術や学者をすべて動員しても、世界の富をすべて使っても、たった1つの大腸菌すらゼロからつくれない。

何故なのか。それは細胞1つ、どうして生きているのかについての根本的原理を、生命科学者は全く知らないからである。1個の細胞についても分からないことが多く残されているのに、ヒトは約60兆の細胞から成っている。60兆という数字は、地球人口65億の約9000倍である。

《この世の最高傑作は生命》

ヒトの身体は膨大な数の細胞から成っているのに、どうして争いもなく、見事に生きていられるのか。ヒトの場合、約300種類もの異なる細胞が器官や臓器をかたちづくっている。そして、細胞や臓器は助け合いながら個体を生かす働きをしている。

これは自律神経の働きとして説明されているが、自律神経を動かしているものは何か全く分かっていない。私は、この見事な助け合いのために必要な情報は、遺伝子に書かれていると考えている。

ヒトの身体では、細胞同士、臓器同士が見事に助け合っている。遺伝子にも利他的な働きをする情報が存在すると、私は思っている。

細胞1つ元からつくれない私たちが赤ちゃんを人間の力だけでつくれるわけがない。

親は受精卵をつくるのに少しだけ協力し、あとは栄養を与えているだけだ。1つの受精卵から、

教会の動き

■**朝づとめ**…毎朝・6時30分
■**夕づとめ**…毎夕・7時00分
■**春季大祭**…1月21日午後1時30分
■**秋季大祭**…10月21日午後1時30分
■**月次祭**…毎月21日　午後1時30分
■**春・秋季霊祭**…3月22日、9月22日　午後1時30分

※教会の場所は、左の地図の❀マーク。市立公民館の裏・西側です。

天理大学雅楽部公演の案内

天理大学雅楽部が定期公演を開催します。天理公演が38回、東京公演は32回、大阪公演は26回を数えます。学生の団体として最高のレベルだと思います。チケットは手元にあります。ご希望の方はご連絡ください。

今年のテーマは、「想思千五年・源氏物語Ⅵ～蛍・常夏の巻より～」。

伎楽　「聖武天皇の夢」
管絃　平調・想夫恋
謡物　催馬楽・貫河（ぬきかわ）
舞楽　高麗壱越調・納曾利
　　太食調・打球楽

天理の2回公演の1回はすでに終わっております。東京、大阪はいずれも1回の公演です。以下の通り。

●天理公演（天理市民会館）
2006年10月25日（水）18時30分開演
2007年3月11日（日）14時00分開演
●東京公演（浅草公会堂）
2007年2月17日（土）14時00分開演
●大阪公演（大阪国際交流センター）
2007年3月4日（日）14時00分開演

《編集後記》

▼新年あけましておめでとうございます。本紙しばらく作成ができませんでしたが、ようやくここに第14号ができました。

▼巻頭から2ページ目に、前回に引き続いて村上和雄先生の11月29日産経新聞・正論から引用し、掲載しました。親が子を、子が親を殺す事件をマスコミに流され、それを見聞きするたびに、一体世の中どうなっているのか、とみなさんもお思いでしょう。村上先生は生命科学の立場から、「自分の力だけで生きている人など地球上に一人もいない」と命の大切さを訴えられています。

▼昨年8月から、わがホームページにブログを設置しました。WordPressというMySQL使用のPHPです。まだ発展途上です。http://sachihiro.com「#やまさんのブログ」からお入りください。

さちひろ　第14号
編集兼発行人・山口　渡
平成19年1月21日
大阪狭山市今熊1丁目1133番地
TEL・072-365-2571

ヒトの赤ちゃんになる間に、胎児は生物の進化の歴史を繰り返すといわれている。胎児は、わずか38週間で約38億年の生物の進化の歴史を経過することになる。したがって、ヒトは地球生命38億歳である。

《生かされている命に感謝》

いま、生きる自信を失いかけている人に聞いていただきたい。宇宙は今から137億年くらい前に極微の1点が大爆発（ビッグバン）を起こして始まったといわれている。そして、ビッグバンの直後に生じた水素原子は現在、生き物の中に残っている。ヒトの身体には、宇宙の進化の歴史が凝縮されている。

どんな未熟な人も全宇宙を背負って生きている。命は自分だけのものではない。そういう意味で命は尊い。自分の命も、他人の命も、壊すのは簡単だが、一度壊したら二度とつくれない。命を粗末にすることは、大自然が137億年もかけて作り上げてきた最高傑作を無駄にすることになる。

この世に生まれてきたこと自体、途方もない奇跡的な出来事なのだ。生きているだけでも有り難く、素晴らしいことだから、自殺も他殺も絶対にしてはいけない。この世に生かされていることに感謝しよう。

私たちは自分の力で生きているように思っているが、自分の力だけで生きている人など地球上に一人もいない。太陽、水、空気、動植物、地球などや目に見えない大自然の偉大な力（サムシング・グレート）のおかげで生かされているのである。

遺伝子レベルで見ると、遺伝子は一人一人違う。それは誰もが、かけがえのない人間として生まれてきたという意味だ。他人と比較して生きるのではなく、自分の花を咲かせるために、オンリーワンとして生まれてきた。

これらの事実から、私たちは生まれてきたことを喜び、生かされていることに感謝すれば、多くの眠っている良い遺伝子の働きがオンになる。あきらめず、努力し続ければ、必ずあなたの遺伝子は目覚め、限りない可能性を引き出せると思っている。（むらかみかずお）　平成18（2006）年11月29日付産経新聞「正論」欄から転載）

幸せを届ける言葉

高橋美津志「ちょっとひとこと」（善本社刊）から

それでいいのか

親は、子供に対して、親として、それでいいのか！
子供は、親に対して、子供として、それでいいのか！
夫は、妻に対して、夫として、それでいいのか！
妻は、夫に対して、妻として、それでいいのか！
兄姉は、弟妹に対して、兄姉として、それでいいのか！
弟妹は、兄姉に対して、弟妹として、それでいいのか！
この言葉を忘れない人の家庭は、いつも幸福である。

『稿本天理教教祖伝逸話篇』44

雪の日

明治八、九年頃、増井りんが信心しはじめて、熱心にお屋敷帰りの最中のことであった。

正月十日、その日は朝から大雪であったが、りんは河内からお屋敷へ帰らせて頂くため、大和路まで来た時、雪はいよいよ降りつのり、途中から風さえ加わる中を、ちょうど額田部の高橋の上まで出た。この橋は、当時は幅三尺程の欄干のない橋であったので、これは危ないと思い、雪の降り積もっている橋の上を、跣足になって這うて進んだ。そして、ようやくにして、橋の中程まで進んだ時、吹雪が一時にドッと来たので、身体が揺れて、川の中へ落ちそうになった。こんなことが何回もあったが、その度に、蟻のようにペタリと雪の上に這いつくばって、

なむてんりわうのみこと　なむてんりわうのみこと

と、一生懸命にお願いしつつ、やっとの思いで高橋を渡り切って宮堂に入り、二階堂を経て、午後四時頃お屋敷へたどりついた。そして、つとめ場所の、障子を開けて、中へ入ると、村田イヱが、「ああ、今、教祖が、窓から外をお眺めになって、

『まあまあ、こんな日にも人が来る。なんと誠の人やなあ。ああ、難儀やろうな。』

と、仰せられていたところでした。」

と、言った。

りんは、お屋敷へ無事帰らせて頂けた事を、「ああ、結構やなあ。」と、ただただ喜ばせて頂くばかりであった。しかし、河内からお屋敷まで七里半の道を、吹雪に吹きまくられながら帰らせて頂いたので、手も足も凍えてしまって自由を失っていた。それで、そこに居合わせた人々が、紐を解き、手を取って、種々と世話をし、火鉢の三つも寄せて温めてくれ、身体もようやく温まって来たので、早速と教祖へ御挨拶に上がると、教祖は、

「ようこそ帰って来たなあ。親神が手を引いて連れて帰ったのやで。あちらにてもこちらにても滑って、難儀やったなあ。その中にて喜んでいたなあ。さあく親神が十分々々受け取るで。どんな事も皆受け取る。守護するで。楽しめ、楽しめ、楽しめ。」

と、仰せられて、りんの冷え切った手を、両方のお手で、しっかりとお握り下された。

それは、ちょうど火鉢の上に手をあてたと言うか、何んとも言いあらわしようのない温かみを感じて、勿体ないやら有難いやらで、りんは胸が一杯になった。

【解説】

増井りんは、大縣（おおがた）大教会の礎を築いた方で、女性初の別席取次人、本部員。誠真実の人であったことは、このお話からも窺えます。親神様は、すべて見抜き見通しで、それぞれの心遣いをご覧になって、その心を受け取って下さっています。「月日にわどんなところにいるものも　むねのうちをばしかとみている」（十三号98）、「せかいぢうどこのものとハゆハんてな　月日しいかりみな見ているで」（十七号29）